

電気新聞 連載

時評「ウエーブ」 第十回

信頼という名の大黒柱

元世界銀行副総裁

シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー

西水美恵子

時評「ウエーブ」 第十回 信頼という名の大黒柱

昨年11月1日、国王戴冠の仏儀が「雷龍の国」ブータンの古都プナカで厳かに行われた。数日後、峠をひとつ超えた首都ティンプーで開かれた祝典の模様を、ニュースで垣間見た読者も多かろう。

「戴冠式は国民のために」との御意を受け、他国の皇族の姿はなく、国賓は隣国インドの大統領のみ。私的に招かれた数少ない外国人の中、国連政府代表部（在ニューヨーク）でブータンを見知らぬまま四半世紀務めたという運転手2人の笑顔に、心が温まった。

10万人を超える国民が参賀に駆けつけた。予想以上の人出に戸惑う付き人を指揮しつつ参賀に臨む雷龍王5世の姿に、なぜかふと大黒柱を連想した。

早朝から夕暮れまで、敬愛と忠誠の印に白絹のスカarfを捧げ、深々と頭を下げる民の目線まで、ひとりひとり丁寧に腰を屈め続ける王。少数民族とお年寄りを励まし、子供には頬にキスをと誘い、幼児を抱き上げ、美女に赤面する青年王。どこからともなく民謡が湧き上がり、快い節回しが朗々と響きだすと、盆踊りの様な輪に飛び入って、民と笑い、楽しむ王。

2年前、父君雷龍王4世から事実上の譲位を受けて間もなく、自然に *People's King*（人民の王）という呼び名が定着した王らしい姿だった。そこには一片の見せかけもなく、祝典で「息子として、兄弟として、親として、民に尽くすが我が務め」と言い切ったリーダーの謙遜のみがあった。

多民族国家ブータンの民は、一貫して礼儀を重んじる。が、相手がたとえ王であれ、異議あれば恐れず真正面から意見するのが国民性。「就任から僅か700日。国民の信頼を掴んだ王だからこそ、人口の6分の1が参賀」とある全国紙の祝辞も、おせじ抜き。

しかし、諸々の式典を滞りなく終えて一息ついた4世が「権力は腐敗する傾向を持ち、絶対権力は絶対に腐敗する」と、英国のアクトン卿が19世紀後半に残した言葉を引用して、私を驚かせた。「5世はこの史実を忘れるなど言い聞か

せられて育った」と笑い、「いかに優れたリーダーでも、独裁的な要素がある政治体制は過ちを犯す。形だけの民主主義も同様。国民が信頼する民主主義が要だ」

12年前初めて賜った謁見で、「この世に唯一の安定は、無常なり」と、政治改革の話題を選んだ4世。「あの時も同じことを」と回想すると、昨年春の総選挙で民主制が成立し、長く難しい学習の道を控える民が、若くして信頼できる国家元首を得た今日、「とても幸せだ」と微笑んだ。

思い出話に花が咲き、長年のご苦労をねぎらいながら、我が国の政治や世界各国金融市場の迷走を想った。国も企業も同じ事。どちらの不安定も信頼を失った結果。その根源は、権力の錯覚を肥に蔓延る傲慢。政治家も金融家も信用が命なのに、愚かなことだ。「この世に唯一の安定は無常」ならこそ、信頼が国民や顧客の安心を支える大黒柱なのだ、気付いた。

ブータンは国民総幸福量と呼ばれる公共哲学を国造りに実践して長い。人間が何よりも望む幸せの追求には、衣食住の安定と共に、人の心の和、家族との和、地域社会との和、自然との和、そして母国の歴史と文化に帰属する自己認識の和が欠かせないと考える。幸せは物のみでは得られないから、高度成長を国政の目的とはせず、国造りの一手段として、「和」を壊さない経済成長を追求する。ブータンの指導者層は常識だと笑うが、彎曲迂回は多いにしろ30年前後その常識を本気で貫いてきた。

物の尺度ではまだまだ貧しい国だが、最近の国勢調査では国民の97%が幸せだと答え、世の専門家を驚かせた。常識を本気でやる政治姿勢。これが信頼という名の大黒柱を建てた。政策効果を待たずしても、その大黒柱が民を幸せにするのだろう。(敬語敬称略)

著者紹介

西水 美恵子（ にしみず みえこ ）

1975年、米ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了後、プリンストン大学助教授（経済学）。80年に世界銀行入行。97年、南アジア地域担当副総裁に就任。2003年に退職。現在は独立行政法人経済産業研究所コンサルティングフェロー。07年に、シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー就任。著書に『貧困に立ち向かう仕事』。

著者へのご意見やご感想は、下記アドレスにお送りください。

個人メールアドレス nishimizu@sophiabank.co.jp

本稿は、西水美恵子氏が、二〇〇九年一月十五日付の電気新聞に、寄稿したものです。
著作権は、著者に帰属しますが、配布は自由に行っていただけます。